



Doll is waiting

ある日のこと、お人形作りのトゥルーさんが仕事をしていると、小さなノックの音がしました。きっとお客様です。

トゥルーさんはゆっくりと揺り椅子から立ち上がると、ゆっくり玄関に急ぎました。

色ガラスの扉を開けるとそこに、薄緑の生地に細かなイチゴ柄のワンピースを着て白いエプロンを付けた、かわいらしいお人形さんがいました。宝石のような緑の瞳はとても悲しそうです。

「ジェシカじゃないか。どうしたんだい？」

トゥルーさんは節くれてしわくちゃの手で優しく抱っこして、毛糸でできた赤毛を優しく撫でました。

「お人形は卒業、ってローズが言ったの」

ローズというのはこの近所に住む女の子で、ジェシカの持ち主です。

「そうかい。あの小さかった子がレディに」

ジェシカを引き取っていった時、ローズはまだ赤ちゃんでした。それがもうお人形がいないと言うなんて。時の経つのは早いものだと思いました。

「寝る時のご飯の時もおでかけだって、ずっと一緒だったのに」

ジェシカはそう言いながら今度は怒り始めました。

「それでね！　ローズは妹のレイチェルにあたしをあげるっていうの！　あたし、レイチェルは嫌いよ。クレヨンでうずまきほっぺを書こうとするし、三つ編みをはさみで切り落とそうとしたわ」

「それはひどいね」

「でもほっぺの時も、三つ編みの時も、ローズが怒ってくれたわ」

ローズがジェシカのことを本当に大切にしてくれていたことを、トゥルーさんは嬉しく思いました。でも、

「遅かれ早かれ女の子はレディになる。ローズにもその日が来たんだよ」

するとジェシカは悲しそうに肩を落としました。

「ローズはあたしのこと、いらなくなったのね」

「それは違う。ただ、君と遊ぶよりも大切なことが出来てしまったんだ」

でもジェシカは何を言っても泣き顔のままです。どうしたものかと困っていると、

「いいじゃない。あなたはまだ遊んでもらえるのでしょうか？」

と、上の方から声がしました。そこには棚があり、トゥルーさんが作ったお人形がずらりと並んでいました。その中で一等古いすみれ色の服のお人形がこちらを見下ろして言うのです。

「私はここ三十年。誰にも遊んでもらってないわ」

「どうして？」

「ディーを待っているから。ディーはお母さんに捨てられそうになった私をトゥルーに預けたの。私に必ず迎えに来るから待っていてって、手紙をくれたわ。見る？」

すみれ色の服のお人形はそう言って棚から飛び降りると、ふわりと床に立ちました。そしてエプロンのポケットに手を入れて、小さな紙切れを出しました。それはもう古くて何が書いてある

のかわからないけど、子供の筆跡でディーという名前は読み取れました。

「だからトゥルーにお願いして、ずっと待たせてもらっているの。私は何年だって待つわ。だってあの子は必ず迎えに来るって言ったんだもの」

すみれ色の服のお人形は、そう言いながらドアの色ガラスを見つめました。ジェシカは三十年も待ったのだからディーという子はもう来ないかも知れないと思いました。

しばらくして、お店に小さな女の子とご婦人が入ってきました。

すみれ色の服のお人形はそれを見てぱたりと倒れて動かなくなりました。動いているところを人に見られてはいけませんから。でも頬はさっきよりもバラ色です。

ジェシカもトゥルーじいさんの腕の中でお人形の振りをしました。

「おばあちゃま。ここなの？」

「そうですよ」

ご婦人は優しく女の子に微笑むと、カウンター越しにトゥルーさん呼びました。

「トゥルーさん。本当に長い間ありがとうございました。ステラを引き取りに参りました」

トゥルーさんは懐かしそうに微笑むと、

「少しお待ち下さい。サンディーさん」

と言って腕の中のジェシカを仕事台に置き、すみれ色の服のお人形を抱き上げて、「よかったね」と、話しかけました。すみれ色の服のお人形はバラ色の頬をもっと赤く染めました。

「抱いて行かれますか？」

とご婦人に聞くと、女の子がご婦人のスカートをひっぱりました。

「この子が、ステラなの？」

「そうですよ」

お人形を手渡ししながらトゥルーさんは女の子に聞きました。

「小さなレディ。お名前は？」

「あたしは、ジュディよ」

「では、ジュディ。あなたがレディになるまで、ステラをお願いできますか？」

すると、女の子は受け取りながら、

「レディになったら、ステラを返さなくちゃだめなの？」

と、小さく首をかしげました。

「いいえ。とんでもない。どうかずっと一緒にいてあげてください」

そう言われるとうれしそうにステラの髪を撫でながら、

「おばあちゃまからあなたのお話を聞いてたのよ。会えて嬉しいわ。ステラ」

と微笑むと、お人形も微笑みました。

「笑ったわ、おばあちゃま」

「そうですよ。ステラはあなたと一緒に笑って、悲しければ一緒に泣いてくれるのよ」

ご婦人はそう言ってすみれ色の服をそっと撫でると、エプロンのポケットのメモを見つけて目を細めました。そしてステラにしか聞こえない声で、
「待っていてくれてありがとう。遅くなってごめんなさい」
と、ささやきました。

二人がお人形を抱いて店を出て行くと、小さなジェシカは仕事台の上で身を起こしました。
「ローズも迎えに来てくれるかしら。おばあちゃんになっても」
ガラス窓の向こうを見ながらジェシカがぼつんと言うと、「当たり前だよ」と、トゥルーじいさんは言いました。
「ならいいわ。ちょっとくらい我慢する。汚れても直してくれる？」
「もちろんだよ」
トゥルーさんは、優しくジェシカを抱き上げて小さな頬にキスしました。
おしまい

真夜中のお客様

お人形作りのトゥルーさんは、今夜もせっせと手を動かします。今は温かい暖炉の前で小さな淡いピンクの生地にレースをつけているところです。これは昼間に仕上げた新しいお人形につけてあげるエプロン。ほら、ドレスのまま遊んだら、ドレスが汚れてしまいますからね。そうなると思い切り遊べないでしょう？

なんて見ている間にトゥルーさんはエプロンを仕上げてしまいましたよ。

満足そうに頷くトゥルーさんは、とんとんと店の戸をたたく音がしたのに気が付きました。こんな夜更けにお客様なんてくるのかしら、と思いながら扉を見ると、満月の月明かりに照らされた影が、スタンドグラスに映っていました。

三回のノックの後、男の人の声がしました。

「お人形作りのトゥルーさんのお宅はこちらですか？」

のぞき窓から見てみると、立派な紳士が立っていました。黒いビロードの帽子に黒の上等の背広、そしてやっぱり黒くてぴかぴか光るステッキをもってすっくと立っていました。

「お店はおしまいですが、何かご用ですか？」

トゥルーさんがそう言うと、紳士は安心したみたいになりにやりと笑いました。

「初めまして、こちらのお人形がとても素晴らしいと聞いてやってきました」

恭しく一礼する紳士にそう言われて、トゥルーさんは首をかしげました。

「それはうれしい……でもどちらで私の作ったお人形を？」

「はい。小さなジュディが持っているステラというお人形がとても素晴らしくて！ 今までたくさんのお人形を見てきましたが、この国中のどのお人形よりもステラに敵うお人形はないと思います」

トゥルーさんはステラを褒められて少しうれしくなりました。紳士は続けます。

「それで、私の娘にステラのようなお人形を、作って頂くわけにはいかないでしょうか」

トゥルーさんはうれしくなって。大きく頷きました。

「わかりました。ではどのようなお人形がよろしいでしょうか？」

すると紳士はにんまりと笑い、金色の瞳をキラキラさせて言いました。

「そうですね。洋服はアプリコット、レースはやわらかなものを、エプロンはクリーム色で。瞳は……私に似れば金色だけど、妻に似れば緑色。どうしたものか」

と、迷っているようでしたが、やっぱり妻の色にしようと言いました。

「緑の瞳ですね。他にご注文は？」

「ステラよりも、小さめがいいですね。半分、いや、四分の一ぐらいの」

そういわれて、トゥルーさんはびっくりしてしまいました。だって、それではとても小さいお人形になってしまって、子供は抱くことが出来なくなりそうですもの。

「お代はこちらに。来月取りに参ります」

そう言って紳士はカウンターの上に何かを置くと、さあっと出て行きました。

ドアが閉まる音がすると、やっとトゥルーさんは大きく息をつくことが出来ました。カウンタ

一の上には宝石がついたりボンが置かれています。これがお代がわりということでしょうか。

次の日になってもそのことが頭から離れません。夢でも見たのかと思えば、売り上げを入れる箱の中には、ちゃんとあの宝石があるのです。

「どれ……どんな子にするかな」

と、絵に描いてみました。でもあの紳士がほしがっているようなお人形がどうしても思い浮かびません。

それでもトゥルーさんは一つお人形を作ってみました。栗色で柔らかなウェーブの髪に小さな緑の瞳。ドレスはアプリコット色で小さな花柄にしました。白いエプロンにはフリルをいっぱい。きっと生まれてくる子はこんなふうにかわいらしいお嬢さんなんだろうなあとトゥルーさんは思いました。

次の満月の日。

明るい月明かりにステッキの音。そしてノック。あの紳士がやってきたようです。

「こんばんは。お人形はできあがりしましたか？」

「はい。このとおりです」

にこにこしてトゥルーさんはできあがったお人形を差し出しました。すると紳士はそれを手にとってむむっと顔を曇らせました。

「あなたにならわかって頂けると思ったのですが……」

残念そうな紳士に、トゥルーさんは困ってしまいました。注文通りの仕上がりのはずですそれなのに、だめだなんて。

「申し訳ございません。ではどのようなお人形ならお気に召してくださるのでしょうか。なにか付け足したり……」

すると紳士は、小さな小さな声で言いました。

「やはり耳としっぽが……」

と。何のことだろうと思いましたが、トゥルーさんは、とにかくこのお人形では満足してもらえないと思いました。

「わかりました。作り直しますので、また一ヶ月後にいらしてください」

紳士は不満げ顔をしかめながら、一ヶ月後に、と言い残して行ってしまいました。

さて、困りました。

あの紳士は「耳としっぽが」と、言いましたから、きっと耳としっぽがあるお人形がほしかったのです。

でもどんな耳としっぽにすればいいのでしょうか。

犬でしょうか。犬ならピンととがった耳もあれば、たれた耳もあります。それとも猫でしょうか。牛や馬も耳としっぽがありますし、ネズミだって。

困ったトゥルーさんは、紳士が「素晴らしい人形」と言ってくれたステラがいる、サンディさんの家に行くことにしました。何か紳士のことを知っているかもしれませんから。

サンディさんの家に行くと、ステラをだっこした小さなジュディが出迎えてくれました。

「こんにちは。小さなレディ。ステラは元気になっていますか？」

「ええもちろんよ。今日も一緒に遊んだの」

ジュディは鼻高々です。すると後ろからサンディさんも微笑みながらやってきました。

「こんにちは。お待ちしていましたのよ」

にこにこ挨拶すると、トゥルーさんを家の中に案内してくれました。

三人はサンディさんがいれてくれたお茶を飲み、お手製のタルトににっこりと笑いました。一通りの話を聞いたサンディさんは首をかしげました。

「そんなに立派な紳士が私の名前を？ 私には見当も付きませんわ」

「そうですか……」

残念そうにしていると、シンディが、

「あら、紳士なら家にいるじゃない、おばあちゃま。ご案内しますわ。こちらにいらして」

と、トゥルーさんの上着を引っ張りました。トゥルーさんはシンディにひっぱられるまま裏口に行きました。そのそばに木箱がおいてあり、中からは毛布がはみ出していました。

「ノワールは紳士なのよ。真っ黒なビロードの毛皮で金色の瞳をしてとてもきれいなもの。今はおでかけみたい」

そっと箱の中をのぞいてみると、そこにはアプリコット色の猫が眠っていました。

「ノワールの奥さんのシンシアよ。もうすぐ赤ちゃんが生まれるの」

ジュディがそう言うと、猫は緑色の瞳でこちらをみて、ちいさくにゃ〜んと鳴きました。トゥルーさんはにっこりと笑いました。

「ノワールはレディファーストを心得ている紳士なの。絶対シンシアよりも先にご飯を食べないんだから。だからあたし、勲章としてノワールの首に宝石が付いたリボンをつけてあげたわ」

ジュディがそう言ってくれたので、トゥルーさんはすっかりわかりました。

「ありがとう。これでわかりました」

「なにがわかったの？」

トゥルーさんは首をかしげるジュディにほほえみました。

「とても大切なことですよ」

人形工房に帰ったトゥルーさんは、改めて耳としっぽがあるお人形を作り始めました。ドレスはアプリコットで、瞳は緑色。目はもう少しつり上がっていた方がいいかもしれないと気を遣いながらね。

一ヶ月後。

あの立派な紳士がお人形を受け取りに来ました。もちろん月の明るい夜に。

紳士はお人形を一目見ただけで、とてもうれしそうに抱き上げました。

「ありがとうございます。やはり素晴らしい。これほどの人形は見たことがありません。とがった耳、それに長いしっぽ！ ドレスはモスリンですな。なんと手触りのよい……。ああ、我が娘にぴったりだ。本当にありがとうございます」

感激する紳士に、トゥルーさんはお代にといただいたリボンを差し出しました。

「これはお返しします。どうかお持ち帰りください」

「なに、これでは不服とでも？ それとも現金でないといけないのですか？」

トゥルーさんは首を横に振りました。

「いいえ、そうではありません。これは、あなたがあなたであるという目印だと小さなレディに聞きました。あなたにとって、そしてあの子にとっても、大切なものでしょう？」

そう言われて紳士は恥ずかしそうにしました。

「私が猫だとお気づきでしたか。……でもこれ以上に価値のあるものを私は持っていません。お代はいかがいたしましょう」

「そうですね。たまに来てこの屋根裏にいるいたずらネズミたちを懲らしめてください。それでいかがです？」

すると紳士の頬から、それはそれはりっぱな猫のひげが、ぴん！ と、のびたのです。

「承知しました。では数日中に伺いましょう！」

紳士はもう一度深々と頭を下げると、お人形を大事そうに抱いて、帰って行きました。

それからしばらくして、ジュディがステラを抱いてやってきました。

「ノワールの赤ちゃんが生まれたの！ 一匹だけだったけどとってもかわいいのよ！ それがね、不思議なんだけど、赤ちゃんそっくりなお人形が箱の中に入っていたの。アプリコットのドレスに緑の瞳。ぴんぴんっておひげもあったし、耳もしっぽもあったのよ。あれは誰が入れたのかしら？ ……もしかして、トゥルーさん？」

小さなレディに、トゥルーさんは言いました。

「いいえ。……でも、きっとそのお人形は、赤ちゃんの大切なお友達になることでしょう。あなたとステラみたいにね」

トゥルーさんがにこにこ笑うと、屋根裏でも満足そうな猫の鳴き声がありました。

おしまい

王子様のお友だち

寒い日のことです。

お人形作りのトゥルーさんのお店にも、北風やつむじ風がやってきて、いたずらにとんとんと扉をたたきます。そんな日はお人形たちのささやきもどこか寒そうです。

お人形作りのトゥルーさんは、あたたかなだんろの前でお人形の最後の仕上げをしているところでした。小さな女の子のためのお人形です。ふんだんにフリルが使われたクリーム色の服で、スカートは四段。段の一つ一つに白いレースがついていて、とても華やかです。胸元にはくすみボタン、後ろには大きなリボンが付いていました。栗色のふんわりとした髪は、トゥルーさんの自信作でした。

もっとももっとかわいくるようにほおべにをさしていたときでした。本当にドアベルが鳴って、北風と一緒にお客さんが入ってきました。グレーのスーツにシャッポをかぶった紳士でした。褐色の肌に黒い瞳。彫りの深い顔。この国ではあまり見たことがない異国の紳士です。

「こんにちは。こちらはお人形作りのトゥルーさんのお店ですか？」

「左様でございますが」

紳士は、ほっと息をつきました。そして大事そうに持っていたカバンから、金糸で織られた布を取り出しました。何かが包まれています。

「このお人形はあなた様が作られた物と聞いて伺った次第です」

紳士はそっとその布を開いて見せました。

トゥルーさんは眼鏡をかけ直して中を見ると、はっと顔をこわばらせ、懐かしいような、悲しいような顔をしました。

そのお人形につけてあげたターバンも服もなにもかもがなくなっていて、腰布だけの裸でした。異国の紳士と同じように褐色の肌。抱き上げるとざらりとした手触り。トゥルーさんの手に砂が少し落ちました。片目は糸だけです。ところどころ傷つき、ほつれ、焦げた後さえあるお人形を、トゥルーさんはていねいな手つきで点検をして、にっこり笑いました。

「大事にしてくださったのですね」

「最初は陛下が、その後妹君がそれは大事にされてきました」

「そうですか。ありがとうございます。そうですね。二週間頂ければお直しできますが」

すると異国の紳士はとても困った顔をしました。

「いえ、私はお返しに上がっただけです」

紳士はそう言うといねいに一礼してそのまま出て行きました。

トゥルーさんは、手の中にある異国の子をそっとなでました。

「お役目ご苦労様でしたね。ちゃんと治してあげますから。そのまえにお風呂にしましょう。きつときれいになりますよ」

トゥルーさんは男の子に安心させるように笑うと準備を始めました。そして、この子を作った時のことを思い出していました。

確かこんな寒い日でした。

まだかけ出しの人形職人だったトゥルーさんは、男の子の人形の注文を受けました。お人形を

注文しに来たのは、国の偉い人たちでした。ある国の王子様のお誕生日祝いに王子様に似せたお人形を送りたいが、他の店では断られてしまったということでした。王子様の写真を拝見すると、この国ではめずらしい褐色の肌をしています。そんなお人形など作ろうと思わなかったに違いありません。でもトゥルーさんは作ったことがないお人形を作ることが好きでしたので、引き受けることにしました。

まず手始めに紅茶や木の皮をつかって生地を染めました。ていねいに型紙に沿って切り抜いて縫い合わせます。つやつやの黒い髪の毛は短髪にして整えました。目のボタンも無理を言ってボタン職人さんに作ってもらった特注品です。トゥルーさんは他の子たちよりも手をかけて仕上げていきました。写真の通りに作った服は右肩から腰にたらず最上級の絹の布と色違いの紺色の長いパンツ。腰の辺りでしばる金を織り込んだ絹のリボンだけです。

「こんな服でいいのだろうか、もっといい服を作ってやりたいのに……。」

そうつぶやきながら顔に目を付けると、黒いガラス玉の瞳で戸棚の上にいるお人形達を見上げ、そして何か言いたげにたまに首を横に振るのです。トゥルーさんは男の子をたしなめました。「そんなに動くんじゃない。今、口を付けてあげるから」

トゥルーさんはそう言うと針山から一つ針をつまみ明るい茶色の糸を通すと、ちょうど口の辺りににっこりとした線を描きました。玉結びをして糸を切った途端、その口はへの字にゆがみました。何かあるのかなと思って見上げますが、興味津々で人形達が見下ろしているだけです。トゥルーさんは頭に髪の毛を付けて首に胴体につけると、手と足を胴体につけました。すると、男の子が勢いよく立ち上がり、棚の上の人形を指さしました。

「なんだよ！ そんなにめずらしいのか！」

トゥルーさんはびっくりしてその子をつかみました。

「こらこらまだ動いちゃいけないよ」

するとくすくすと笑い声が戸棚の上から机の上に降りてきました。

「だっておかしいんですもの、黒いお人形なんて。それに、おおいやだ。この服。下着じゃないの。あなた絶対売れ残ってよ」

絹の布をつまみ上げて、金色の髪の毛のマリーが言いました。すると隣の赤毛のシェラも、「ドレスを作ってもらえないなんてかわいそうね、あなた。わたしをごらんなさい。茶色のキャラコよ。イチゴの刺繍いりなの。きれいでしょう？ トゥルーさん、この子に繻子の燕尾服を作って差し上げて。ああでもそのお顔の色では黒はだめね」

そう言って羽根扇で口元を隠しながらいじわるく微笑みます。トゥルーさんは顔をしかめました。

「おまえたちおやめ。今日からこの子も家族になるのだから。」

手の中で暴れる男の子の人形をそっと机の上においてやると、トゥルーさんは男の子に微笑みました。

「たしかに君は他の子とは違う。それはね。」

トゥルーさんはそう言いながら、仕事用の引き出しをあけると、中からあの写真を取り出しました。そこにはお人形そっくりの男の子が微笑んでいました。

「きみがある国の王子様の友達になるように作られたからなんだよ。」

お人形達が息をのみました。そんな名誉なお人形になるとはとうてい思えなかったのでしょうか。シェラもマリーも悔しそうににらんでいます。

「だから、ちっともそんなことを気にする必要はないんだよ。」

トゥルーさんがそう言ってくれるのに、男の子は黙り込んでしまいました。

その夜。

トゥルーさんが最後の仕上げをして、いいにおいがする箱に入れようとした時です。男の子が目ぱちりとあけて起き上がりました。

「どうしても行かなくてはだめか？」

男の子は膝を抱えてそのあいだに顔をうずめました。きっと明日もらわれていくのがいやなのでしょう。たまにこうして嫌がる子がいるのです。

「他の子はここにいられるのに、何故僕だけだめなんだ？」

泣きそうな顔をしている男の子を見てトゥルーさんは困ってしまいました。他の子たちだってそのうちもらわれていくのです。その間ここで待っているだけなのです。マリーやシェラにしてみたら、作られてすぐにもらわれていく男の子がうらやましくてしかたがないのですが、男の子にはとても辛いことでした。

「どうしても帰りたくなったら戻っておいで。私はここでずっとお店を開いているから。」

トゥルーさんが笑いかけると、男の子は渋々うなずいてまた箱の中で横たわりました。

次の日、できあがったお人形を取りに外交官達がやってきました。外交官達はそっくりにできあがった男の子の人形を大喜びで受け取って出て行きました。

何年か経って、あの国でクーデターが起こり、王様が国から追い出されて、国の中で戦争が起こりました。その戦争は、まだ続いています。

お人形用の小さなお風呂に入れてきれいにしてあげているあいだも、男の子はしゃべりませんでした。トゥルーさんは何度もお湯を替えて汚れを落とし、最後に柔らかい布できれいに拭いてあげました。

数日後、乾いた男の子の焦げた肌やほつれた手足を繕いました。褐色の肌は少しさめた色になりましたので、色粉をはたいて染めなおしました。少しずつきれいになっていく男の子を見て、トゥルーさんはほっと息をつきました。

人形達が心配そうにトゥルーさんと男の子を見下ろしていました。

「その子、遠い外国に行った子でしょう？」

「男の子の人形なんて珍しいわ」

「王子様のところに行った子よ」

「でも何故こんなになって帰ってきたのかしら」

「きっと辛いことがたくさんあったのよ。こんなに汚れて……」

小さなさざ波のように人形達のざわめきも聞こえていないのか、トゥルーさんは無言で手を動かしました。髪を少し足して、目を付けました。同じボタンはなかったので、ほんの少しだけ色の違う目になってしまいましたが、とても綺麗な色です。そして前のように最高級とはいきませ

んでしたが、ターバンを巻いて、上等の絹を肩から腰に垂らし、それを腰のところでリボンでしばりました。

その時、ふっと小さな吐息が聞こえました。男の子の口元が少し動いたのです。

「おかえり。よく戻ったね」

トゥルーさんがそう言うと、男の子は頬を緩めました。

すると上から「おかえり」「おかえりなさい」などと人形達の声が降ってきました。男の子は微笑みながらゆっくりと体を起こしました。

「辛い目にあったのかい？」

すると男の子は硝子の瞳を揺らしましたが、すぐに微笑みました。

「いいえ。王子には毎日のように遊びました。もったいない名前も付けて頂きました。でもあのクーデターで長い間城に置き去りにされたので汚れてしまいました。それまでは幸せに暮らしていました。」

そして男の子は聞きにくそうにして言いました。

「あなたは……私が戻って、うれしいですか？」

男の子はそう言って小さな手を伸ばしました。

トゥルーさんはその手をそっと握って握手しました。この子は長い間ひとりぼっちでどんなに辛かっただろう。自分は捨てられてしまったのだと、いらぬ人形になったのだと哀しかったに違いない。生み出した人を思い出してうらんだりしたかもしれない。そう思うとトゥルーさんの瞳はうるんでいました。

トゥルーさんは極力笑顔を作って微笑みました。

「ああもちろんだとも。また会えてうれしいよ。傷は大丈夫かい？ どこも痛いところはないかい？」

男の子は体のあちこちを見回して、

「はい。ありがとうございます。でもそろそろお別れです。」

お礼を言うとゆっくり立ち上がりました。そして、トゥルーさんの針山から金色のまち針を出すと、それを剣のように腰のベルトに差しました。

「私には王子と姫君を守る義務がありますので、帰ります」

トゥルーさんは彼にゆっくりと言いました。

「どうやって行くつもりだい？ 君の国はずいぶん遠い。それに王子様とお姫様がどこにいるのか、君は知っているのかい？」

そう言われた男の子ははっとしたように顔をこわばらせた。

「君を預かるときに二週間後に仕上げると約束したよ。連れてきた人はきっと来る。それまでここで待とうじゃないか。」

「そうよ。あなたのお迎えが来るまでみんなで祈りましょう。ね？」

お人形達とトゥルーさんは、男の子のために一心に神様に祈りました。

神様、どうかもう一度、この子をあの王子様の元に……。

その夜も寒くて、褐色の紳士はかじかんだ手をさすりながら入ってきました。

「お待ちしていました」

トゥルーさんのお辞儀を見て、紳士はぼつが悪そうに視線をそらして言いました。

「あの人形は直ったのでしょうか」

トゥルーさんはにっこり笑って、男の子の人形を抱き上げました。

「この通りです。少し色があせてしまいましたが」

すると紳士はうれしそうに微笑みました。

「おお……」

紳士は男の子の人形を受け取りました。そしてあちこち見て、

「よかった」

ぽつりと言いました。そして腰に差した針を見て微笑みました。りっぱな王子です。

「この子も喜んでいますよ」

すると紳士は男の子の人形の瞳をのぞき込み、苦しそうに笑いました。

「それはない。置き去りにしたのだ。先日何年かぶりに屋敷に戻ったら地下室の床にこの子が落ちていた。汚れて焦げた後もあって……。ひどい目に遭わせてしまった」

「でもあなたはここに彼を連れてこられた。そして直してくれと言ってくださった。大事に思ってください、彼は幸せ者です。」

紳士は男の子の黒い髪を撫でて、幸せそうに微笑みました。そして紳士は何かを我慢するように顔をしかめ、ふうっと息をついたのです。

「ありがとう」

そして彼はカバンの中に大切に人形をしまうと、代わりに金貨の袋を出しました。

「お代はいかほど……」

「こちらが勝手にしたことですからお代は結構ですよ。王子様。」

トゥルーさんはにっこり笑うと、紳士はびっくりして目をまん丸くしました。

「ちがいます。私は……先のクーデターで失脚した男の息子で、王子ではありません。」

「でもあなたは母国を愛していらっしゃる。だから国にお戻りになったのです。」

紳士はちょっと下を向いて少し考えていたようですが、次に顔を上げたときは何かを決意したような厳しい顔をして、金貨の袋をしまいました。

「お心遣いありがとうございます。それでは……お元気で。」

紳士は出て行こうとしました。トゥルーさんはあわててその背中に聞きました。

「その子の、人形の名前を教えてください。なんと付けられたのですか？」

紳士はくるりとふり向き、にっこり笑いました。

「この子を作った方がその国の言葉で“真実”を意味する名前を持つと伺いました。私は彼に母国語で“真実”という名前を送りました。」

紳士は異国の言葉で男の子名前を言いました。

トゥルーさんははずかしくて赤くなった顔をかくすように深くお辞儀をして、紳士を送り出しました。

また何年か経って、新聞を見たトゥルーさんは、ああ、と、声を上げました。

その新聞には異国の中でおこった長い長い戦争が終わったことと、新しく王様になった方は元王子様だった。ということが書かれていました。

写真に新しい王様と家族が映っています。

「王子様は王様になったのね」

遊びに来ていたステラが微笑みます。

「そうだよ。彼も一緒にね」

王様の娘の手の中で、あの男の子の人形が誇らしげな顔で抱かれていたのです。

おしまい